



いわき小名浜からの便り 第1回

東京のみなさまへ

2011年3月11日、東北地方を中心に太平洋側500キロに渡る未曾有の大震災に見舞われました。沿岸を襲った津波は一部23メートルの高さに達し2万人近い死者・行方不明者を出しました。

震災から6年が経過し風景が一変しました。海が見える東北の湘南と呼ばれた小名浜の海岸線は見上げるほどの防潮堤が建設され穴倉に押し込められたような錯覚に陥ります。かつての美しい風景は簡単に見ることはできなくなりました。

最大の問題は、福島第1原発の爆発事故の後遺症を今も先行き見えない深刻な負の遺産として福島の人々がこの先孫の代まで背負わされたことです。

今も故郷を追われた人々が9万7千人近くに上り、また今なお放射能で故郷に帰れない人々が5万7千人を数えています。地域が分断され、家族が分断され、狭い仮設住宅での長い生活を余儀なくされている方々もあきらめの感じがただよっています。

最近オリンピックが近づいているからか、常磐線の復旧が急ピッチで行われています。

徹底した除染作業と復旧工事が同時進行する異様な光景が目の前に広がっています。線量の高い夜の森駅、富岡駅はまもなく完成します。しかし、私の線量計の数値は国の定めた安全な数値を大きく超えています。ここに駅舎が造られて、乗り降りする人々の健康が案じられます。便利さや経済の効率と命とが天秤にかけられています。

近頃では、地元メディアでも、原発汚染地域の情報が話題に上ることは極めて少なくなりました。また、仮設の人々の生活も同様にご近所の方以外には知る機会はありません。

自分の目で、耳で、足を運ぶことが今こそ必要だと感じています。忘れられた村や町そこに確かに生活が在ったことを伝えたいと思います。

これから何回かに分けてリアルタイムで現地の生の声を東京の皆さまにお伝えしていきたいと願っています。

2017年8月1日

小名浜聖テモテ教会

司祭 越山健蔵

6年を経た被災地は、今どのようになっているのだろうか。また、いわゆる「被災地」と呼ばれる場所からは遠い所に住む私たちは、具体的に何を思い浮かべて祈ったらよいのだろうか。そんな気持ちを、東北教区 小名浜聖テモテ教会 越山健蔵司祭にご相談しておりましたところ、「いわき小名浜」の様子を継続的にお送りくださることになりました。

私たちは、広範囲にわたる被災各地の今の状況や、被災された人々の困難や感じ方が一様ではないことを心に留めなければなりません。「いわき小名浜」からの便りを通して、6年前の災害は終わった過去のことではなく、今、被災した人々が奪われてしまった日常生活をそれぞれの形で再び築くにあたって、今なお暗い影を落とし続けている出来事であることに思いを致し、祈り続けていきたいと思ひます。

(記: 教区事務所 災害対応デスク)